手づくり市民メディア

あまいろだより

vol.59 山の水が枯れてきた ～水源を訪ねる

2025.12.15

お産の体験手記集　あまいろだより別冊

『OSANBON vol.2』発行！

TAKE FREE

お産は一人一人多様。女性がしっかり尊重されたお産はその後の子育ての基盤です。お産の選択肢がますます少なくなっている今、語り合いが大切と、お産の体験手記集を作りました。協賛金を集めて制作費に充てています。ご協賛いただいたみなさん、ありがとうございました！

引き続き協賛金募集中です～！

『OSANBON vol.3』の制作も予定（2026.11）

一口 1000 円から

目標金額　10 万円

ご希望の方には OSANBON vol.3 をお届けします

お申し込みフォーム

＼ めっちゃおすすめ～ ／

「学校行かないカモラジオ」配信中！

滋賀県出身の井ノ口環（たまき）さんがインタビュアーとなり、学校に行きづらい子どもの育ちや学びを支える活動に取り組む方々を訪ねて、お話を伺う番組です。ぜひお聞きください。

Spotify　Podcast　Youtube

NOW ON SALE

何度も洗ってつかえるエコラップ

ミツロウラップ 販売中 !!

Beeswax Wrap ミツロウラップ

オーガニックコットンの生地にミツロウ（たまぱん@信楽のニホンミツバチのミツロウ、オーガニックミツロウ）とオーガニックココナッツオイルと松ヤニをいい塩梅にブレンドして、あまいろ探偵団が手づくりしています。（監修 Biwabochi ちまり）

▶ 取扱店　Base For Rest（東近江）、自家製酵母パンひとつぶ（能登川）、NPO 碧いびわ湖（安土）、自然食品と生活用品の店 hana（草津）、cafe あわいさ（信楽）

▶ 発送ご希望の方は、あまいろだより FB･インスタにメッセージにてお問い合わせください。（送料別途）

Sサイズ 13×13cm　（半分に切ったリンゴなどに）
Mサイズ 20×20cm　（お皿に残ったおかずなどに）
Lサイズ 26×26cm　（サンドイッチやおにぎりなどに）
LLサイズ 28×40cm 、36×36cm　（キャベツ半分などに）

あまいろだより ホームページ やってます

最新号 バックナンバー 読めます～

amairo.media@gmail.com

あまいろだよりにご意見ご感想をお寄せください

あまいろだより（天色便り）第59号
特集　山の水が枯れてきた～水源を訪ねる
編集　あまいろ探偵団（北岡七夏･志萱未来･中野和子･藤井朋子･森優子）
表紙タイトルロゴ　岸田知之
発行日　2025年12月15日
発行　特定非営利活動法人碧いびわ湖
～大切なことを他人まかせにしない。自分たちで力をあわせてつくる～
TEL 0748-46-4551　FAX -46-4550
Eメール info@aoibiwako.org
ブログ http://aoibiwako.shiga-saku.net/
碧いびわ湖
びわ湖の森を元気にするkikitoペーパーを使用しています（びわ湖の森の間伐材活用）
kikito biwako-no-mori

山の水が枯れてきた ～水源を訪ねる

輝く太陽の光
自然信仰の残る山々
そこここに 野鳥や獣たちの気配

静かな山水の流れ
川沿いには山葵の葉っぱ
野いちごの実
茗荷やシャガの群生

幻想的で澄んだ空気
稲の育つ田んぼ
藍の畑
野草の根の張った 緑の美しい畦

自然と人がつながる暮らし
ここから創る未来

地図イラストは、水源ツアー「水探訪」の資料 (小障子菜々子さん制作) より使わせていただきました。

プロフィール

こしょうじ まさよし
小障子 正喜さん

1978 年生まれ、大阪育ち。

中学 2 年生の時に不登校となり、20 歳まで引きこもりの生活を送る。その後、地元の夜間高校に入学し、大学・大学院へと進学。タネトヒトの前身である農事組合法人大戸洞舎の研修事業（どっぽ村プロジェクト）に参加し、研修途中で社員となり、その後代表となる。株式会社タネトヒトに組織を変更し、今後は既存の農業生産と里山と農業をベースとした体験事業の展開を図る。好きな食べ物は納豆かけごはん（生卵、めかぶ、柚子胡椒入り）。

こしょうじ ななこ
小障子菜々子さん

1978 年生まれ、滋賀育ち。

18 歳まで上山田で暮らし、京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）情報デザインを経て、東京にてエンターテイメントのデザイン会社に勤務。30 歳を目前に、地域の役に立ちたいと思うようになり U ターン。地域産業のパッケージを中心としたデザインに携わる。手を動かして里山にある自然と親しむことがライフワーク。日本の豊かな里山が次世代に継がれることを願っている。好きな食べ物はプリン。

＼ **「農事組合法人大戸洞舎」は、2026 年より「株式会社タネトヒト」へと移行します。** ／

米づくりを主とした農業を基盤に、里山に身をおいていただける体験事業をつくっていきますので、今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。組織移行に伴い、HP･SNS も新年にオープンします。大戸洞舎の Instagram にてお知らせしますのでフォローしていただけると幸いです。

『碧いびわ湖』が取り扱っている、水源に一番近い山の水で育てられた無農薬のお米の生産者さん『大戸洞舎（オドフラシャ）』のお二人が、水源ツアーをされていると聞き、今回は滋賀県長浜市の自然豊かな上山田地域に行ってきました。

こしょうじまさよし
小障子 正喜さん

こしょうじななこ
小障子菜々子さん

あまいろ（以下あ） このツアーを考えられたきっかけは何ですか？

正喜（以下正） ここ数年で田んぼに入れる山の水が全然取れなくなってきていて、もちろんこの気候の変化で雨の降らない時が続いたりはしているんですけど、もう春先ぐらいから山の水が細いんです。いつもやったら代掻きするぐらいまでは十分水があるんですけど、それが取れないぐらいの量になっていて。

菜々子（以下菜） 今年は、いつ水が切れてしまうんだろうかってヒヤヒヤしました。

正 田んぼの水の溜まる側と抜ける側があるんですけど、抜ける側が干からびるっていうことがここ数年はほとんどの田んぼで起きていて、稲が枯れてしまうんです。地面にクラックができて、そこから水がざっと抜けて水が溜まらない。地面もカッチカチに。

で、反対に溜まる側はずっと山水が浸いてるんでじとじとと深くて、コンバインがはまるっていう。機械への負担が、平野部の条件のいい田んぼに比べて二倍近くかかるんです。先代からの老朽化している機械なので、故障も増えています。

菜 山の水だけでお米を作っている田んぼなので、めちゃめちゃ愛着があるんですけど。

正 僕がここに来て十七年ぐらいになるんですけど、初めの頃は水に困るっていうことを全然意識したことがなかったんです。一体山の水はどうなってるのかなと考えて、それをみんなと共有できたら、と資料を作ってツアーを組んでみたんです。

荒れる山林と獣害

菜 集落に近い田んぼと奥の田んぼの間は、おじいちゃんの世代が高度成長期に植樹をして、杉林になっています。造林公社の関係で山裾もずーっと杉林で。

正 植えた木で家を建てるつもりだったと思うんですけど、今はもう手入れする人が誰もいないんです。

うちらの地域は山の中に水路があって、年に何回か整備したり、まだそういうのをやろうっていう村の人がいてくれるので、比較的環境が保たれてはいるけれど、山がどんどん廃れていくと、田んぼもできなくなりますよね。

あ 村の人が作業されてるんですね。

正 そうなんです。数年前まで獣害防止の柵もなかったので、シカ、イノシシを対象に柵を設置しました。行政はやってくれないので、村総出で上山田の周囲七～八キロ、一枚一枚並べました。一応市が半分ぐらいは補助金を出してくれるけど、残りは集落持ち。やっと全部できたけど、稀にシカがよじ登ってくる場所もあるんです。そもそも県道は塞げないので一部柵が切れているところも。そこからツーツーで入ってくる。でも、これ以上はみんな休日返上ではできないので、ちょっと諦めてるという状況なんです。

あと、森林整備の事業を使って、間伐をした場所もあります。踏み入れられないくらいの間隔で竹が生えていた竹林で。獣がそういうところに潜んでどんどん出てくるので、今までは竹林に近い田んぼ数枚は米が穫れることがなかったんです。かと言って、その田んぼで米作りを諦めて放棄田にしても、獣害が広がっていくだけなんで、ちょっとでもマシになればと思って整備をしてみたんですけれど。

あ どうでしたか？

正 ある程度整備してる段階の時は良かったんですけど、草刈りするだけになると、また獣が入ってくるようになって。どうにかしなあかんなって思った矢先にキャンプ場のオーナーの方が、景色がすごくいいって言ってキャンプ場として借りてくれはって。そこからやっと米が穫れるようになりました。

あ やっぱり人の気配があると違うんですね。

暮らしの変化と人々のつながり

正 昔は谷から集落まで水を引っ張っていたそうです。

菜 私が子どもの頃、お風呂は山水で、雨が降ったら濁ったお風呂になって。洗い物とかは山水を使ってたっていう暮らしでした。

正 みんなで集落の方に延々と黒いパイプをつないできて、それを利用していたそうです。上水が来るまでは、みんなの水みちを全部村の人らで掃除して手入れをして、きれいにした水を流す、というのが普請の一環としてずっとあったみたいなんですけど、僕がここに来た時にはもうなかった。集落のおばあちゃんとかから昔はみんなできれいにしてたんやって聞いて。

今は農業用水や排水の施設とかの手入れに関しては、作業に出てくれる村の人もいるので何とかもってるけど、もう暮らしから田んぼが切り離されていて。大体みんな勤めに出て帰ってくるっていう暮らしで、うちが田んぼを預かってるという形なので「なんで俺らが作業をしなあかんのか」って言う人も中には居ります。それをうまく合意形成を図っていくのがすごく難しいんですけど、地道にやっていくしかない。みんなでこの環境を作っていこうということを話しています。

菜 そもそも自分が水とつながってるっていう実感が湧かないと体も動かないと思うから、水源の水が滴るところを見ることで、こういうふうに水って自分たちのところに流れ着いてるんだ、みたいな想像回路がつながってくれるといいなって思ったんですよ。やっぱり感動がそこには必要なんじゃないかなって思って。

あ ほんとですね。そういうことがベースになってこの環境が守られていくといいですね。

正 上山田は基本的に除草剤を使わないので、年に二回くらいみんなで草刈りをしてるんです。体力的には大変ですけど、植物の根が入ることで土を保持してくれています。ラウンドアップとか、ああいう除草剤は根まで殺してしまうので、以前撒いていた時には、斜面の土やアスファルトの道の下の土が崩れてしまって、ザーッと流れてしまったということがあって。その時に村の中で話をして、やっぱり除草剤を撒くのはやめようと。それに関してはもう皆さん納得してはるんで、今のところ作業に出てもらってます。役員会の時とかでも、草刈りの必要性ということも定期的に話をしています。

菜 今はコツコツと村の人と話をして調整してる感じですね。

山の問題と水の問題

あ 山の水が細くなっているということでしたが、何が問題なんでしょうか？

正 山には木が鬱蒼と茂っていて、一見するとすごく気持ちはいいんですけど、ちょっと入っていくと真っ暗で全然下草が生えていないんです。そうするとカッチカチの土になって、結局、雨が降っても、一瞬で水がザーッと走っていってしまうんです。

下層植生があると、植物の根とか木の根が土に入り込んで、そこを雨水が通って地下の水になります。それがゆっくり滲み出てくるんです。でも、下層植生が全然ないと表層水が地表流になって出て行ってしまうので地下水になる量が減るんです。もちろん限界はあるけれども、だいぶ貯水量が変わるっていうデータが出ています。

今はもう木を切っても使い道がなくて、お金がかかるばかりになってしまっているので、山に人が入っているのを見たことがないんですけど、本来は人が手入れをして、下層植生を昔みたいに維持していく方が、山の水を利用するのにはいい姿かなと思うんです。

あ なるほど。山の整備は全国的な問題にもなっていますね。

正 今、整備をしても数年で状況が良くなるわけじゃなくて、やっぱり何代もかかります。だからと言って、もう諦めてスタートしないのか、ちょっとでもやって次の世代につないでいくのか、これからの課題かなと思っています。

あ 山の問題が水の問題にもつながるんですね。

正 山の奥には、何本も細い水の筋があるんです。その細い筋が集積してずっと下までいって、高時川と合流して琵琶湖の方に流れていくので、言ってみるとここも琵琶湖の源流のうちの一つなんです。

日本では中山間地が農業の大体四割を占めています。ここできちんと中山間地とその周辺の環境を管理して行かなかったら、残りの六割の平地の田んぼとかにもやっぱり影響が出てくるはずだと思います。

あ 四割もあるんですね。川上から川下への影響を考えて、全体的な問題として捉えることが必要ですね。

正 そうなんですよ。だから、すごい今踏ん張り時なんやなというふうに思うんです。

里山の農を未来へ繋ぐ

あ 昨年は米騒動も起こりましたね。

正 米不足をきっかけに米の問題に関心を持ってもらえるようになって、農業制度のあり方がおかしいっていうのをみんなに知ってもらえたのは良かったかなって思います。ただ、まだまだあんまり補助金のことは言われてない気がするんですけど、実は平野部で大規模にやる人を優先する形になってしまってるんです。

あ そうなんですね。

正 だからいろんな小規模の農家さんとかもやっていけるような形にしていかないと、と思います。田んぼの維持だけじゃなくて、村の環境を維持するという面でもやっぱり人手がいるんで、そういうところにもっとお金が使えへんのかなと思います。

あ 必要なことですよね。

正 現状は大型化することにバンバンお金を使って、いまだに『規模拡大、収益増大』っていうのが行政の基本方針で、そんなのがいつまで続くのかなって思います。大規模農家の中でも百ヘクタールを超えるメガファームっていうところしか補助金を取れなくなっていて。

あ そんなことになっているんですか。

正 うちらは「もう田んぼを広げずに、中山間地の農地を維持して、これからも永続的にやっていきたい」という話をしても、長浜市は「対象外で機械への補助金は使えません」と言うんです。でもこういうところを維持していかへんかったら、他も荒れていく可能性がありますよっていうことを今、行政に伝えています。

あ 山から琵琶湖まで、さらにはもっと先までですが、全てつながっているということが伝わるといいですね。

菜 水がちょろちょろと琵琶湖へと集まってくるさまを想い描くことから色々と想像が広がって、面白いなと思ったりするんですけど、昔の村々の水争いの話とかもね、各地域で水を巡ってぶつかった名残があると耳にしたりもしますし、そういう風土の歴史から発生している現代の関係性とかもあって。そこに人の繋がりを感じるし、理由があって、複雑になっていることもある。こういうのって、世界でニュースになっている『国と国』の関係と、ある種同じじゃない？って思ったりして。目の前で起こっていることと世界で起こってることは結構一緒って感じるから、近くを知るって大事なんじゃないかなと思います。

正 これからも里山という生態系豊かな環境を残していくために自分たちができることの一つとして、水源ツアーが未来への種まきになればと思っています。

あ とても大切なことですね。今日はありがとうございました。

暮らしのコラム

令和のコメ騒動と食卓
～多様なコメ農家への注目が必要

まつだいら なおや
松平 尚也
宇都宮大学農学部助教

メディアではコメ価格の報道ばかりが目立ち消費と生産の現場を分断させる要因となった。価格に注目するあまり、コメのコスト面や農業の規模が中心に議論され、結果大規模・企業化が必要という単純な論理ばかりが展開した。

コメづくりは、価格が上がったらすぐに大規模化して増産したらよいといった単純なものではない。例えばコメのタネである種もみは 2 年前に注文して確保する必要がある。今年は作付けを増やしたい農家が多く、種もみの奪い合いのような状況も生まれた。

一方、コメ価格はこの 30 年低米価が続いてきた。高騰すれば騒ぎになるが安い時はほとんど話題にならずコメ農家の離農が相次いだ。実際、2000 年から 2020 年の間にコメ農家の戸数は 6 割減少しており、このまま減り続けると 2030 年代に国内のコメ需要分の供給ができなくなる可能性も指摘されている。

日本の農地は中山間地が約 4 割を占め、海外のように水田の大規模化が難しい地域も多い。実際、大区画された 1ha 以上の水田は水田全体の約 6%に過ぎない。その中で注目したいのは水田と農業の多面的機能という関係である。コメ作りには大量の水が必要でお茶碗一杯のコメを作るために最大一升瓶 250 本分の水が必要とされる。一方、水田の水利用は還流と呼ばれ、地下水や河川に再流入し下流域で再利用される循環システムとなっている。降雨量が多い梅雨の時期に水を水田に溜めて夏場に都市部が渇水になる時期に河川に水を戻すという水資源涵養機能と洪水防止機能を併せ持つ。水田が生産を伴ったダムと呼ばれる所以である。中山間地の降雨量は平野部よりも一般的に多い。中山間地の水田が減ると、多面的機能が減退し下流部にある都市部の経済活動に影響する可能性もある。つまりコストと規模の側面以外の視点からも水田の評価をする必要があると言えるのである。

コメ生産の大規模化は、近年継続して取り組まれてきた。一方で全体のコメ作付面積における 15ha 以上という大規模なコメ農家の割合は作付面積全体の約 27%であり、経営体数で言うと約 1.7%にとどまる。小中規模のコメ農家が日本のコメ生産の屋台骨を支えている現状がある。

また一部の大規模農家が言うには、地域の小中規模の農家がいないとコメ生産が継続できないということだ。なぜなら規模を拡大すれば人件費や生産コストが上昇すると同時に、農地や水路といった農業資源の維持作業の負担も多くなるからだ。大規模なコメ経営体の持続には、中小規模のコメ農家が継続できる政策環境が必要と言えるのである。

現在のコメ政策の課題として感じるのは、農村の持続を担うコメ農家が見えていない点にある。上述してきたごとく水田や農業資源は、農村の持続も必要となる。大規模な水田経営を実践するコメ農家も大切だが、水田の持続そして安定したコメ供給（食料安全保障）のためには、中小や家族経営などの多様な経営体への政策支援が不可欠と言える。